

文化財
NEWS速報

《心と技を未来に伝える》 荒川の匠育成事業が始まりました

技術展の記念イベント「文化財トークセッション」伝統工芸の可能性～過去から学ぶ・未来へ伝える～で紹介された。

(平成 21 年 12 月 20 日於荒川総合スポーツセンター)

第 30 回あらかわの伝統技術展で紹介された職人と現場実習者



荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住 6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録 (21)0088号

「荒川の匠育成事業」とは

荒川区には、ものづくりに携わる職人が数多く住んでいます。中でも、江戸時代以来の伝統的な技術を受け継ぐ

職人（無形文化財（工芸技術）保持者）が多いことで知られ、「匠の町」と呼ばれています。

区教育委員会では、生活に密着してきた技術をもつ職人たちを区の無形文化財（工芸技術）保持者として登録・指定し、「あらかわの伝統技術展」を始めとするさまざまな事業を通して、これらの技術の保護と継承に努めてきました。しかし、生活様式や急激な社会の変化など、伝統工芸技術を取り巻く環境が大きく変わり、技術の伝承が困難な時代となっているのも事実です。貴重な技術をこの世代で絶やすことなく、次世代へ継承するための方策をとることが急務となっています。

そこで、区では、職人の技術を受け継ぎたい、伝統工芸の世界に飛び込みたいという熱意のある若者を支援するため、「荒川の匠育成事業」（荒川区伝統工芸技術継承者育成支援事業）を行いました。研修手当や指導料、家賃補助等の交付をはじめ

として、この事業で技

東京の「匠の町」で ものづくりにチャレンジ! 伝統工芸技術の継承者募集



「荒川の匠育成事業」パンフレット

術を修得した若手職人の作品コンクールを行うなど、一つでも多くの技術が未来へ伝わることを目指します。

職人見習いの決定について

今年度は、ステップ 1 の「職人見習い」の短期現場実習者として 4 業種（指物、勘亭流文字・寄席文字・江戸文字、木版画彫・鍛金）各 1 名を募集し、全国から 72 名もの方々から応募がありました。書類選考と面接を経て、4 名の現場実習者が決定し、昨年 12 月に開催された第 30 回あらかわの伝統技術展では実習者を紹介しました。1 月からは職人の下に通っています。実習者は、3 ヶ月の実習を経て、ステップ 2 の「弟子入り修業」へ進むことができます。多くの方がステップ 2 へ進み、将来、あらかわの伝統工芸技術の継承者となってくれることを願っています。詳しくは、文化館にお問い合わせ下さい。

（加藤陽子）

南千住のシンボル「ラシャ場の煉瓦塀」残る!!

旧千住製絨所煉瓦塀の保存活用に向けて――

平成 20 年 1 月、旧千住製絨所煉瓦塀（南千住 6 丁目 43 番）は、煉瓦塀の所有者と商業施設出店事業者のご理解とご協力が得られ、区へ寄贈されました。ここでは、その保存に至る経緯と、今年度実施した構造補強工事及びその後の計画についてご報告します。

保存までの道程

平成 18 年 12 月、荒川区文化財保護審議会は、歴

史的価値があるとして、旧千住製絨所煉瓦塀が区の文化財にふさわしいものと答申を出しました。

同 20 年 12 月、商業施設出店計画に伴い、所有者

と商業施設出店事業者、区教育委員会を含めた三者で協議を重ねた結果、一部煉瓦塀を区へ寄贈し、保存することが決まりました。煉瓦塀の南側については、公開広場として整地するにあたり、見通しなど、安全確保のために撤去することになりました。

同 21 年 3 月、11 月に撤去工事が行われ、北側約 9 m、南側約 8・4 m が保存対象となりました。

安全にも配慮―構造補強工事について

平成 21 年 2 月、区教育委員会

員会では、煉瓦塀の保存活用を検討するため、所有者の同意を得て煉瓦塀の現状を把握する構造調査を行いました。目地や煉瓦の劣化、強度試験などの調査をし、補強工事方法についての検討もしました。



解体前の旧千住製絨所煉瓦塀

左奥に写る煉瓦塀の上には、防火用のコンクリート塀が設置されていた。煉瓦塀の手前にある石は、車止め用の石である。

寄贈後の同 22 年 1 月 20 日から 29 日にかけて、煉瓦塀の構造補強工事を行いました。長年にわたる劣化等によりひびの入った部分には無収縮性のセメントを入れ、ひびの左右からエポキシ樹脂を注入し、ステンレス製のネジボルトを打ち込み固定しました。また、煉瓦塀全体も耐震性を高めるため

に、同様の工事をしました。解体撤去した切断面には、劣化防止剤の塗布も行いました。

今後の活用について

平成 22 年秋に、商業施設が開店するのに合わせて、南千住の歴史を伝える貴重な文化財として維持していくため、煉瓦塀の環境整備工事を行う予定です。煉瓦塀の洗浄などをを行い、また、説明板を建てて大きさを伝えていきます。

多くの方の協力を得て保存が決まった煉瓦塀。みなさんで、よりいつそう地域の歴史や文化財大切にし、愛情をもつて守っていきましょう。

〈加藤陽子〉



構造補強工事終了後の旧千住製絨所煉瓦塀

煉瓦塀全体を、エポキシ樹脂とステンレス製のネジボルトで固定した。また、従前に取り付けられた鋼鉄製の補強材であるアングルをすべて取り外した。なお、写真右端の柱は、旧千住製絨所の正門の一部である。

今日のこの人②

村越 向栄

今回の「今日のこの人」は村越向栄さんです。向栄さんは、江戸琳派の流れをくむ画家で、酒井抱一の弟子鈴木其一のそのまた弟子の村越其栄の息子さんです。ちなみに、父の其栄さんは、「絹本着色献上鶴図」(個人蔵、区指定有形文化財)が有名ですが、向栄さんも荒川区と所縁の深い画家で、当館常設展示室に展示されている千住製絨所の絵馬を描いています。

さて、図1は、このほど存在が知られた向栄筆

とされる梅の枝を描いた掛け軸です。枝の部分には、「たらしこみ」という江戸琳派特有の技法が用いられています。繊細かつ鮮やかに描かれた江戸琳派の

様式をもつこの掛け軸は、残念ながら伝えた人が分りません。そのため、どこに誰が向栄さんに描かせたのかは不明です。とはいっても、このよつた掛け軸が、手習いで描かれたとは考えにくいので、やはり注文により描かれたと思われます。日本家屋に床の間が当然のようにあつた時代、毎年初春の頃、飾られたのでしよう。

先頃、千住仲町の旧家から、向栄さんが手がけた屏風(「十二ヶ月花鳥図屏風」)が発見されました(「東京新聞」平成21年9月30日号)。このようなことを考えると、掛け軸から絵馬に至るまで、向栄さんは、こうした地域の需要に応えて絵を描き続けたといえそうです。

5月27日、山谷堀に面してあつた料亭「重箱」で、還暦祝いが開かれ、併せて光琳派絵画

展覧会が催さ

れました(玉蟲敏子『都市の中の絵』ブリュッケ、2004年)。当時の新聞記事によれば、絵画等が400点余も出品されたといいます。さらにその翌々年の3月には、向栄さんのために、千住の「長者」による光栄会という組織が、展覧会を準備しました。千住本願寺分教所にみんなで珍藏品を持ちよることになり、向栄さんを囲んで楽しもうという趣向の会であつたらしく、こちらも400点余の絵画や工芸品が集まつたそうです(「東京朝日新聞」明治35年3月18日号)。この時、向栄さんは、「光琳派の老画家」などと称されているように(同前)、明治後半

図2 落款部分

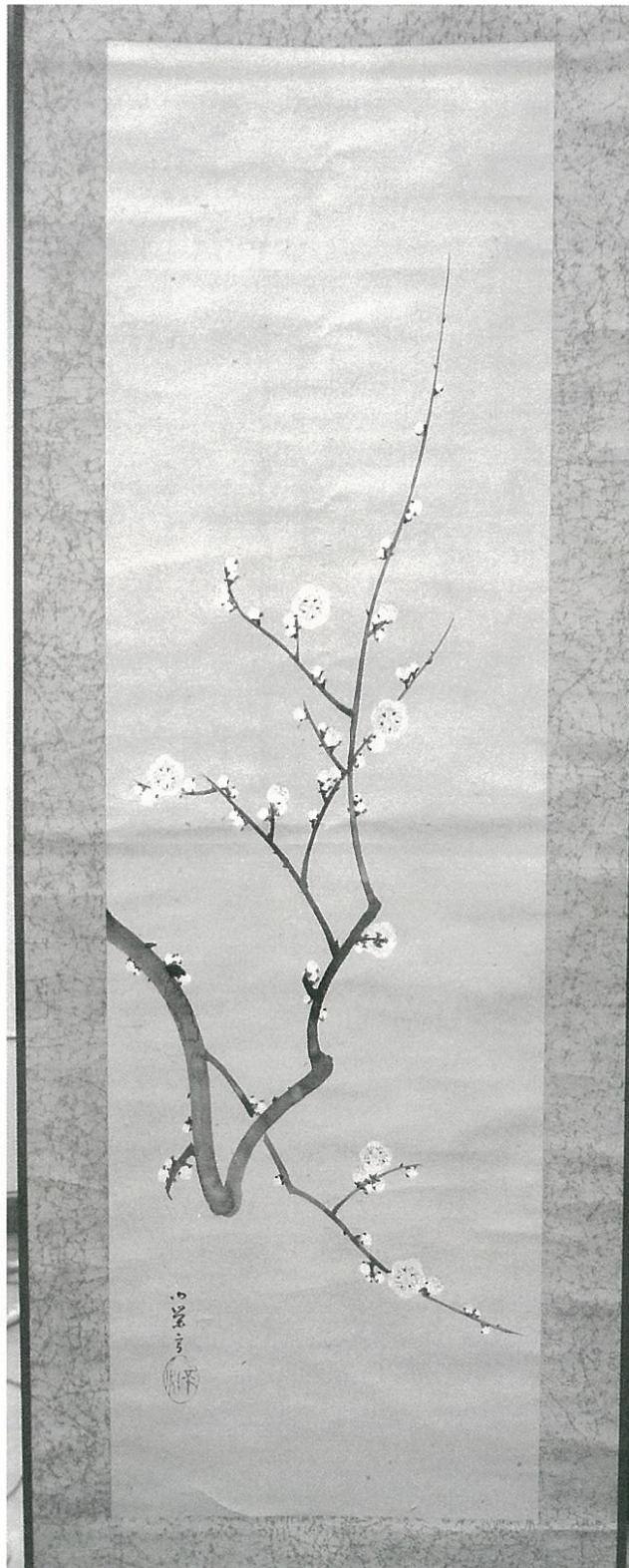
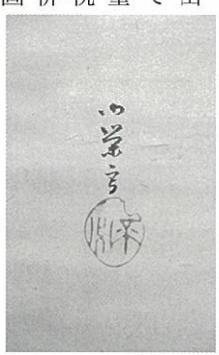


図1 向栄筆「梅の図」(著者蔵)

でもその一方で、地域に住む庶民の求めに応じ、筆を揮うという横顔も忘れることはできません。向栄さんは、江戸琳派の作品が大衆へと広げる役割を果たしたといえるかもしれません。

(亀川泰照)



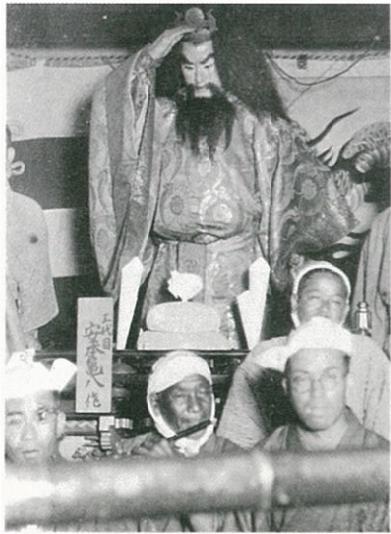
過ぎゆく季節へのたより V

明治の天王祭と山車人形

南千住は素盞雄神社の天王祭といえば、千貫神輿をイメージされる方が多いに違いないが、稲田姫と熊坂長範という『三河島（現荒川）』の山車人形を思出す方もきっといるに違いない（共に、区指定有形民俗文化財）。昭和 7 年（一九三二）に刊行された『三河島町郷土史』によると、山車人形にはもう一体、戦災で焼失したといわれる素盞雄命もあつた（写真）。文化文政の頃から明治初年にかけては、毎年、小室節とともに、三河島はもとより、三ノ輪や下谷坂本、さらには上野広小路まで曳かれたと伝えられている。

◎

ところで、かつての天王祭の山車人形は、この 3 体だけだったかというと、どうももつと沢山あつたらしい。「読売新聞」明治 33 年（一九〇〇）5 月 31 日号には、天王祭に計 8 台の山車が出ると紹介されている（表）。当時は、三河島だけでなく、南千住



「三河島町郷土史」より

や三ノ輪、町屋にも山車があつたのだ。要するに、『三河島町郷土史』は、あくまで三河島の山車人形のみを守備範囲として書いていたのである。それともかく、ここには素盞雄命や熊坂長範の山車人形がないことも目を惹く。未だ所持していなかつたのか、あるいはちょうどこの年、修復中であつたのかも知れない。一般に、明治の半ば、神田・日枝の両祭礼では、財政的な問題から、関東周辺の小都市へ売却されていったとされているが（例えば、『続・江戸型山車のゆくえ』（千代田区教育委員会、一九九九年）、三ノ輪から引き出される神功皇后の山車は、「此程買入」とあり、そうした中で、この時期天王祭の山車人形は増加していく可能性もあ

表 明治 33 年の天王祭における山車

町・村	山 車	備 考
南千住町	日本武尊	
	楠公（楠木正茂）	法橋山車
	加藤清正虎狩	
三ノ輪	武藏野	
	神功皇后	法橋山車／「此程買入」
三河島村	稻田姫	
	祇園祭	
町屋村	花山車	

* 「読売新聞」明治 33 年（1900）5 月 31 日朝刊より作成

さて、『三河島町郷土史』に戻ろう。同書によれば、山車の巡行は、昭和 7 年段階には途絶えていたようだ。人家が密集し、警察から山車の巡行許可がおりなくなり、毎年、通次年番によつて会所に陳列し、公開して昔の名残りをとどめているに過ぎない、と記している。今日、両山車人形は、毎年祭礼の期間、神酒所などに飾られるが、つまりこれは、昭和以降の習俗といえるだろう。とはいって、そうなつて 90 年近くの歴史があるという見方もできる。事情はわからぬが、南千住や三ノ輪の人びとが、山車人形を手放していく中、三河島の人びとは、稲田姫と熊坂長範を代々大切に伝存してきたのだ。今日に至るまで。

◎ ◎ ◎

また、あくまで新聞の予告記事であり、実際のところは保留しておく必要があるが、神楽屋台も、千住大橋南詰、大踏切の際、貸座敷三亜楼前、金光教会前と通新町に設けられる予定と伝えられている。さらに、記事中、「引出し」という言葉が用いられている点は注目に値する。どうやら、明治の天王祭には、山車の巡行があつたのだ。新聞に掲載されるほどであるから、当時は神輿より注目されていたに違いない。山車の巡行に関する資料を集めてみると、明治 11 年に三河島村の村田平十郎と常田長四郎が警察に稲田姫を宮地通次から荒川通次まで渡し、その後飾りたいと願い出ている（『三河島町郷土史』）、同 24 年には、山車 5、6 台を出す、としている（『読売新聞』明治 24 年 8 月 4 日号）。

る。案外、東京の市内から購入した山車人形も、中にはあつたかもしれない。

◎ ◎

区外に刻まれた区の歴史(2)



淨閑寺の板碑（拓本）

草創期の淨閑寺 一八千代の仏像修理銘が語るもの――

区登録有形文化財・淨閑寺の板碑 南千住2丁目の淨閑寺に

は、正和2年（一一三二）11月銘の板碑があります。この板碑には、線刻の日月が彫られています。もし、これが中世のものであれば、全国の板碑の中で最古の日月例となります。ちなみに、日月の初見は室町時代とされ、日待・月待等の供養板碑に施されるものと考えられています。淨閑寺の板碑は、阿弥陀の種子一尊を刻んだ鎌倉末期の板碑であり、また江戸時代の延宝3年（一六七五）に追刻があることから、日月は江戸時代に彫られたと解釈されてきました。この板碑への関心は、日月が彫られた時期に終始していたというのが正直なところです。

今回の報告は、追刻された銘文に関するものです。板碑の表面には「松晉南貞・淨晉妙清・貞順信女・迎晉按意・妙寿信女・心晉清月・華理信女・順晉順誓・貞寂童女」他一名の戒名、裏面には「生國撰州大坂幾玉之住、奥田氏松晉玄清、延宝三乙卯年五月廿九日」と追刻されています。

きっかけはレフアレンスから 平成19年夏、千葉県八千代市の方から「三輪村の靈吟寺」という寺を探しているというお問い合わせを受けました。八千代市村上の正覚院本尊の木造迦叶如来立像（千葉県指定文化財）の延宝2年霜月の修理銘札に「願主武州三輪村靈吟寺門弟願晉貞故」、厨子扉の墨書きに「武州江戸三輪村靈吟寺　願主願晉貞故」とあるそうで、仏像のによると、願晉貞故が願主となり、正覚院がある村上村や江戸の人びとの喜捨により、仏像の修理が叶つたとあります。

釈迦如来立像の厨子扉の銘や「池証山鵠鷺寺正覚院縁起」

です。

三ノ輪のお寺といえば淨閑寺。板碑に追刻があるのを思い出し、淨閑寺の寺伝や『あらかわの板碑』等の報告書を文案内しました。

それから、2年後の平成21年夏、八千代市立郷土博物館で同仏像の展示会が開催されるということで、再度調査することとなりました。延宝2年の釈迦如来立像の大修理には「武州三輪村靈吟寺門弟願晉貞故」が大きく関与していたと考えられます。修理の際に首柄に書かれたと推定される墨書きには「松晉玄清　南無阿弥陀仏」、同院蔵の絹本着色地蔵菩薩像の墨書きには「松晉玄清奥田氏菩提之為」とあり、淨閑寺の板碑の裏面銘の戒名と同一であると思われます。

淨閑寺II靈吟寺？さらに「淨閑寺過去帳」（区指定有形文化財）の冒頭にある歴代住職中に「二世聲蓮社念晉上人願故・靈吟和尚 延宝二甲寅歲正月廿九日 十四年」（傍点筆者）と見えます。淨閑寺の開山は、寺伝では明暦元年（一六五五）と伝えますが、寛永6年（一六二九）に開かれたという史料もあります（元禄9年（一六九六）「淨土宗寺院由緒書」『増上寺史料集』第7巻）。初代住職は天蓮社晴晉上人隨行順波。

寛文元年（一六六一）に没し、二世願故靈吟がこれを継ぎました（「淨閑寺過去帳」）。このことから「三輪村靈吟寺門弟願晉貞故」の「靈吟寺」には、二世の名で淨閑寺のことを呼んだ可能性が考えられます。また、「門弟願晉貞故」の戒名は二世「願故靈吟」の「願」「故」を通字にしているとも考えられ、靈吟について出家したものと思われます。



木造釈迦如來立像（正覚院）

報告書持参で、該当するお寺を探しに来られたとのことでした。正覚院とは真言宗豊山派の寺で、本尊は京都の清涼寺のお釈迦様を模した鎌倉時代の仏像だそう

塔にも、この3人の名前が刻まれているそうです（<http://sanpobokko.com/>）。

また、正覚院に後世に持ち込まれたと思われる寛文13年銘半鐘には、願晉貞故が願主となり清晉淨真と妙園が結縁し、念仏講中の逆修のため造ったと記されています。正覚院の

塔（sanpobokko.com/）。

ところで、願晉貞故を取り巻く人々とが、遠く離れた寺院の仏像の修理に寄与するには、どういった背景があつたのでしょうか。ひとつには願晉貞故らが、他の地域でも、勧進による仏像や造塔等の修理・建立を行つていて、これら事例はその中のひとつであるという可能性が考えられます。ま

た、願晉貞故を取り巻く人々とが、生業などで、江戸時代の八千代市の人びと何らかの関係を持つていたことも検討しなければならないでしょう。いずれにしても、江戸時代の追刻のある板碑が、草創期の淨閑寺の動向を窺う上で貴重な資料であることが明らかになりました。今後の調査に乞うご期待！

（野尻かおる）

【参考文献】『あらかわの板碑』（荒川区教育委員会、一九八六年）、『正覚院の修理報告書』（八千代市教育委員会、一九八一年）、『正覚院展』（八千代市立郷土博物館、二〇〇九年）

土の中の
荒川区⑤

小塚原にみる 六道 錢



六枚のかたまりで出土した寛永通宝
平成 14 年 小塚原刑場跡遺跡出土

出土した錢 平成 14 年度に小塚原刑場跡地の一部の発掘調査が行われました。遺跡の調査では、出土したときは気づかず、後の整理作業で知る情報が多くあります。今回は調査中に出土した約 270 枚の古銭について取り上げます。

この大量の銭は、人骨に伴つて出土したことから、副葬品である六道銭（＝六文銭）と見るのが自然なようです。

三途の川 六道銭は、江戸時代には早桶などの中に副葬品とともに入れられた銭で、一般的に 6 枚で 1 セットです。死者が三途の川を渡り、あの世にいくときに持たせる銭で、俗に三途の川の船渡し賃といわれます。中世に遡り、近世を中心に事例が見られます。

小塚原からの出土銭 とはいって、六道銭は、6 枚とも限らず、本遺跡から出土した六道銭は 6 枚以上の多くの枚数がまとまつた例や、6 枚以下の少ない枚

数の例が多く出てきています。遺跡の調査に当った主任調査員の水山昭宏氏によると、出土した六道銭は、江戸時代全般に流通していた銭で、その内訳は、寛永 13 年（一六三六）に最初に鋳造された古寛永通寶、寛文 8 年（一六六八）に鋳造された銭の背面に「文」の字が見られる文銭、元禄 10 年（一六九七）以降に鋳造された新寛永通宝等が確認されているといいます。

絵銭 その中でも珍しい銭が出土しています。まず時計回りに「南無阿弥陀佛」と読める念佛銭と呼ばれる銭で、そして、もう一枚は梵字が書かれているものです。この他、雁首銭、熙寧元寶といった銭が出土しています。梵字で書かれた銭の出土例は少なく、珍しい銭です。この梵字は大日如来の真言を表しています。

こうした銭は一括して絵銭とよばれ、実際に使えるお金ではなく、死者の供養など別の目的で造られたと考えられます。

刑場 という場所 死者を弔うための副葬品は、六道銭以外にも数珠や塔婆などが見つかっていて、この



熙寧元寶
平成 14 年 小塚原刑場跡遺跡出土



念仏錢
平成 14 年 小塚原刑場跡遺跡出土



大日如來の真言が鋳出された銭
平成 14 年 小塚原刑場跡遺跡出土

【参考文献】 水山昭宏「発掘された六道銭」（『橋本左内と小塚原の仕置場』荒川区教育委員会、二〇〇九年）、鈴木公雄『出土銭貨の研究』（東京大学出版会、一九九九年）

（八代和香子）

タチカワ
シネマズ

素盞雄神社神輿鳳車と
宮彌師後藤忠明



とは呼ばずに「花車」と記

輿を載せて神社の前で撮影した写真（写真2）。左側の背が高い男性が棟梁の安

天王祭と鳳車 素盞雄神社の天王祭は、二天棒で神社神輿を担ぐ雄壮な神輿振りで知られている。本祭の年、神社神輿は、氏子域である「南千住三之輪地区」「三河島地区」「町屋地区」を巡回し、御旅所である町屋の原稻荷に泊り、翌日再び巡回して素盞雄神社へと戻る。その迫力は、千貫神輿と言われる神社神輿の存在を抜きにしては語れない。しかし、「動」の神輿振りが際立つのは、神社神輿を車に載せ肅々と61ヶ町の氏子域を巡行する「静」の渡御行列があるからに他ならない。渡御行列の際に神社神輿を載

せる車を「鳳車」と呼ぶ。この鳳車は、大正14年（1925）に調製されたものだ。花鳥に彩られ華麗な姿を呈しているが、太平洋戦争の空襲で被害を被り、平成2年に日光社寺文化財保存会により修繕

久留里と南千住を結ぶ鳳車

素盞雄神社の調査で、内部に「大正拾四年調整」「南総君津郡、小櫃村、諸宮製作所」「棟梁 安藤作平、彫刻 後藤忠明」の墨書きがあることが判明していたが、記された人物等についての情報は無かつた。

この度、君津市立久留里城址資料館の企画展の事前調査により、同館所蔵資料と素盞雄神社の鳳車が深く結びついていることが明らかになり、「久留里の社寺展」（平成21年10月～12月）で紹介された。

資料は、鳳車の古写真、感謝状、記念の盃からなっている。古写真の内1枚は、工房の前で撮影したもので「新式 神輿台花車 東京行」という札が立てられている(写真1)。ちなみに、ここでは「鳳車」

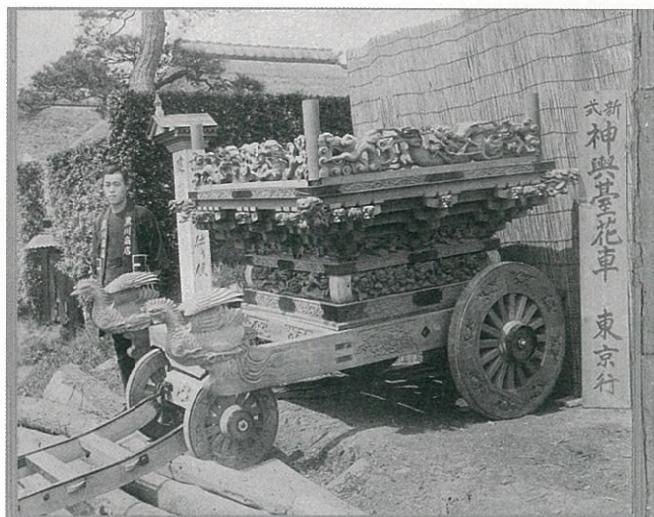


写真1 富大工 安藤作平と「神輿台花車」

A black and white photograph capturing a traditional Japanese festival scene. In the center, a highly ornate mikoshi (portable shrine) is being pulled by several men dressed in traditional courtly attire (fukinuki yūzoku). The mikoshi is intricately decorated with gold leaf, colorful patterns, and large, stylized characters. It features a prominent front wheel with a sunburst or star pattern. The background shows a large, leafy tree and a building with a tiled roof, suggesting a shrine or temple setting. The overall atmosphere is one of a formal, historical event.

写真2 神社神輿を載せた鳳車

師後藤義光の門人で、安房・南房総の寺社建築や祭礼の屋台に多くの彫り物を残している（久留里の社寺）君津市立久留里城址資料館、二〇〇九年）。総代小宮山佐次郎 ところで、氏子総代の小宮山とは、どのような人物だったのだろう。『荒川区史』をめくると、町議会議員で後に南千住町長も務めた地元の名士だった事が分かる。南千住町消防組三代組頭とも見えるので、鳶等の建築関係者の可能性がある。そうであれば、大工棟梁の安藤や宮彌師の後藤といつた職人とのネットワークがあつたとも考えられよう。鳳車の製作は、小宮山が中心となつて行われたのかもしれない。折しも大正14年は震災復興の建築ラッシュで、景気は向上していた。また明治の初年から8月3日に変更されていた祭礼日が、2年前によく6月3日に戻された。こういつた機運が、鳳車の新調につながつていつたのではなかろうか。

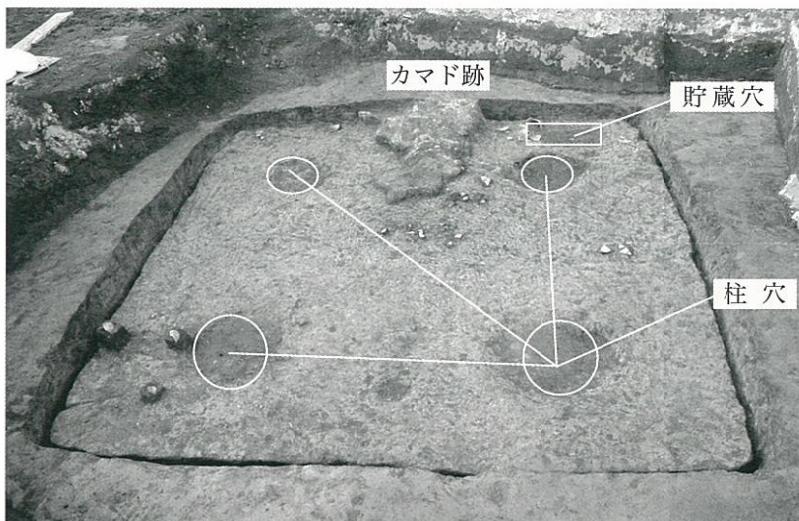
〈野尻かおる〉

【参考文献】『久留里の社寺』（君津市立久留里城址資料館、二〇〇九年）、『荒川区史』（荒川区、一九三六年）

速報 !! 曰暮里から古墳時代の住居址発見

区内から新たな遺跡が見つかりました。埋蔵文化財包蔵地内の分譲住宅開発予定地において、事前調査をしたところ、堅穴住居址の一部が発見されました。平成 22 年 1 月からの本調査では、一軒の住居址全体が検出されました。区内の台地上で古墳時代の住居址が見つかったのは初めてのことです。

場所は、西日暮里三丁目の富士見坂上の近くです。この辺りは諏訪台と呼ばれ、諏方神社、浄光寺、養福寺など社寺が立ち並び、飛鳥山（北区）から上野



古墳時代の堅穴住居址



堅穴住居址完掘状況



カマド跡出土土器

公園（台東区）へと続く台地の途中に位置しています。台地上から発見された遺跡は、遺跡の地表面が浅いのが一般的ですが、今回は厚く盛土された土の下から住居址が見つかっています。大きさは凡そ 5 m 四方、中には柱穴が 4 本、住居を囲む溝、貯蔵穴、カマド跡などが残っていました。カマドからは、当時使っていた焼き物（土師器）が見つかっています。現時点では、出土品の土師器やカマドをはじめとする住居の使用法から、7世紀後半の古墳時代にあたる遺跡と考えられています。この頃の堅穴住居では、カマドを使って調理するのが一般的です。

今回の調査で驚かされたのは、地域のみなさんの

遺跡への関心の高さです。諏訪台通りに面した調査地は、地元の人たちだけでなく、観光客も多く行き交う場所で「埋めてしまふのがもったいない」「昔も向こうで遺跡が出ましたよね」などの声をいただきました。この周辺に住む人たちの記憶には、今回の調査地より凡そ 200 m ほど離れたところに位置する、日暮里延命院貝塚で行われた昭和 62 年の調査が印象に残っていたようです。

なお、今回の本調査は開発事業者の方のご協力を得て、調査が実現しました。速報展で第 2 報を、夏ごろには調査報告書も刊行予定です。乞うご期待。

（八代和香子）

お買いもの④ 錦絵に描かれた「ひぐらしのさと」

今年度も、荒川ふるさと文化館では、新たに資料を収集しました。今回は、「ひぐらしのさと」とうたわれた江戸時代の名所・日暮里を題材とした錦絵をご紹介します。



歌川貞虎「日暮布袋」(『東都七福詣之内』)

日暮里のイメージ
画面中では縁側に
描かれた青雲寺のお堂
にも似ており、画
中の情報からだけ
では判別は難しい。

として知られていた日暮里の寺院を題材としている。

七福神詣とひぐらしの布袋 年初に行う七福神詣は、江戸では十八世紀の後半には成立していた谷中七福神が最も古いといわれる(『江戸図説』安永2年(1773)草本、寛政11年(1799)再書)。十方庵敬順が著した紀行文『遊歴雑記』(文化11年(1814)成立)にも、初春に谷中の七福神へ参詣して、その年の吉祥を願う恵方参りが行われていたことが記されている。

日暮里の寺院は谷中七福神の一つとして知られている。ただし、日暮里の布袋などの寺院とするかは、時代によって異なる。文化年間以前までは青雲寺に布袋堂があつたが焼失したという。お堂は文化年間以後に修性院に再建され(『武江年表』嘉永3年(1850)成立)、布袋尊像は現在でも修性院に安置されている。

作品が描かれた年

代とお堂が再建さ

れた年代から、お

そらく本作品の題

材のひぐらしの布

袋がある寺院は修

性院と思われる。

しかし、萱葺屋根

の雰囲気は、『江戸

名所図会』に描か

れた青雲寺のお堂

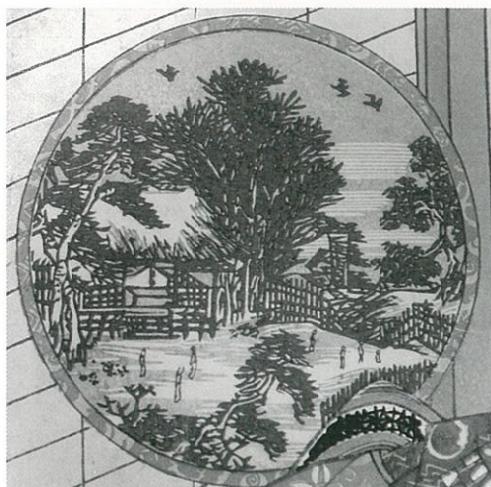
にも似ており、画

中の情報からだけ

では判別は難しい。

実は、今年度収集した資料にはもう一点、日暮里を題材とした浮世絵があります。これとあわせて、平成22年4月に当館で開催する「速報! あらかわの文化財展」で公開する予定です。そちらもぜひご覧ください。

(齊藤照徳)



小間絵に描かれた風景 (拡大)

立つ婦人と背負われた子が水の張られたらいをのぞき込んでいる。その左上の小間絵には、茂る木々に覆われたお堂と人が行き交う風景が描かれている。写実的ではないかもしれないが、絵は日暮里のようないかしらねーが、絵は日暮里のイメージが、タイトルの「日暮布袋」と組み合わされば、日暮里の寺院を想像させるには充分な情報となつたのだろう。婦人の前掛けやかんざしは瓢箪がかたどられ、布袋とあわせて絵を子供の幸福を願う縁起物に仕立てている。「ひぐらしのさと」は人びとが福音を求める地でもあつたのである。

文学館通信 Vol. 2

**【雨の三河島・尾久―歴史小説
吉村昭コレクションより】**

『彰義隊』の名場面

『彰義隊』の名場面

現在、荒川区は「(仮称) 吉村昭記念文学館」の設置に向けて、準備を進めています。

そこで、夫人で作家の津村節子氏よりご寄託頂いた、吉村昭氏の遺愛品や直筆原稿などの関連資料の中から、今回は『彰義隊』をご紹介します。

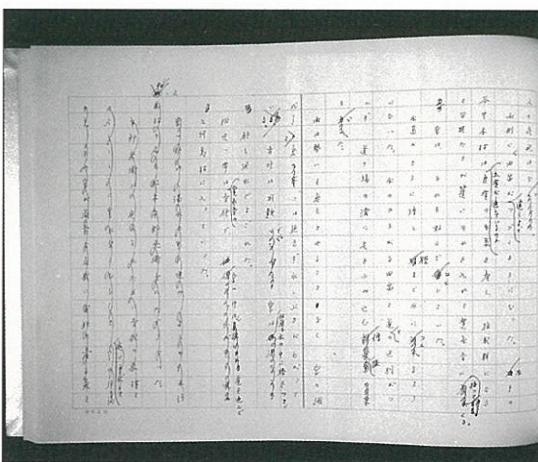


写真1 『彰義隊』直筆原稿

作家吉村昭氏のふるさと彰義隊 谷中の墓地から、寛永寺境内を抜け、上野へ。そこは日暮里出身の作家吉村昭氏にとって少年時代から慣れ親しんだ遊び場でした。そこで吉村少年は、トンボを追いかげ、映画を観ていました。彼の遊び場と日暮里周辺の土地は、後の作家としての創作活動に大きな影響を与え、いくつもの作品に登場することになります。吉村少年は日暮里での暮らしのなかで、自分が住む地域についての昔話を耳にします。その中に彰義

隊は、将軍徳川慶喜を助けるために奔走した寛永寺山主輪王寺宮能久親王とともに、三河島・尾久へ落ちのびていきます。自分の暮らす地域を逃走する彰義隊。昔話はふるさとの思い出として、吉村少年の心に刻まれました。

けれども、彰義隊が戦った上野戦争は一日で決着がついたこともあり、作家吉村昭氏は彰義隊の話を小説にしようと思わなかったようです。ところが、調査をしてみると、寛永寺から逃げる輪王寺宮をかくまつた植木屋や大百姓の子孫の存在をつかむことができ、そこで輪王寺宮の逃亡について細かな伝承を得ました。吉村氏は、幼い頃からなじんでいた土地、少年時代に聞いた昔話、調査で得た伝承をもとに、歴史小説『彰義隊』の執筆を決意したのでした。

直筆原稿と資料 写真1は『彰義隊』の直筆原稿です。原稿は上・下二巻に製本されており、原稿用紙の枚数は上巻三六七枚・下巻三八〇枚。輪王寺宮が三河島・尾久を逃れる場面をはじめとし、推敲のあとが数多く見られます。

執筆の参考資料は、紙袋に入れて保管されています(写真2)。その資料の中で、彰義隊敗走時の天候、地名、人名などには赤線が引かれています。そこからは吉村氏の小説を書く上でのこだわり―史実に忠実であることがうかがえます。

幕末から明治への移り変わりを、自身の調査とするさとの思い出とともに書き上げた『彰義隊』は、吉村氏の最後の歴史小説となりました。

〈野尻泰弘〉

雨、泥、逃げる：ここで小説『彰義隊』の一場面
―三河島・尾久地域の様子をご紹介します。

5月15日朝、新政府軍は上野の彰義隊を攻撃し、夕方には彰義隊が敗走していきます。降りしきる雨の中、寛永寺を脱出した輪王寺宮とその一行は、長雨で水に浸かった三河島・尾久を泥にまみれながら逃走します。当時、三河島・尾久は農村で、田畠が広がるこの地域は激しい雨が降ると水がついたため、ちよつとした屋敷には小舟が用意されていました。目立たないよう変装した輪王寺宮一行は、小舟に乗り、大きな屋敷を持つ植木屋や名主の家を転々としながら、新政府軍の追跡を逃れます。

納屋に隠れる。新政府軍の探索が迫る。再び雨と

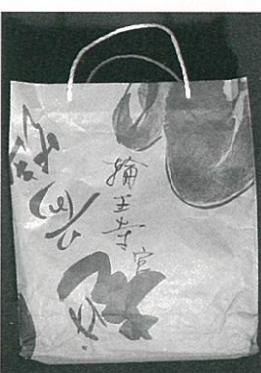


写真2 『彰義隊』参考資料を入れていた紙袋

【お知らせ】 6月12日(土)から7月14日(水)まで、荒川ふるさと文化館において、平成22年度吉村昭記念企画展「作家・吉村昭の交遊録(仮)」の開催を予定しております。みなさまのご来場をお待ちいたしております。

【問合せ】 教育委員会事務局社会教育課文学館調査担当 電話 03-3802-3111(代) 内線 3353

